

## 第2回四万十町総合振興計画審議会 会議録

開催日時：令和2年12月21日（月）18：00～20：00

場 所：四万十町役場東庁舎1階大ホール

出席者（15名）：横山 順一、尾崎 弘明、神田 修、佐竹 孝太、船村 覺  
三浦 ひろみ、森 雅順、岡村 健志、酒井 紀子、鈴木 幸代  
野村 宏、藤澤 久美子、八木 雅昭、山本 由美、森田 健嗣  
（敬称略）

欠席者（5名）：太田 祥一、泉 茂、国廣 純一、田邊 誠進、中島 克明  
（敬称略）

事 務 局：四万十町役場企画課（4名）

### ■ 会議次第

- 1 開会
- 2 令和元年度地方創生推進交付金事業に係る効果の検証及び認定地域再生計画の中間年評価について
  - ① 事業実績について担当課より説明
    - (ア) 四万十町を知る取り組み
      - ・情報発信事業
      - ・広報戦略策定及び情報共有促進事業（シティプロモーション）
    - (イ) 四万十町を体感する取り組み
      - ・観光振興事業
    - (ウ) 四万十町に住む取り組み
      - ・移住促進事業
    - (エ) 四万十町で育てる取り組み
      - ・未来塾事業
      - ・四万十塾事業
      - ・産業振興塾事業
  - ② 質疑応答
- 3 意見交換
- 4 その他
- 5 閉会

## ■会議資料

- 1 会議次第
- 2 委員名簿
- 3 令和元年度地方創生推進交付金事業（評価資料）
- 4 令和元年度地方創生推進交付金事業評価資料（別冊）

## ■会議録

（事務局）

それでは、本年度第2回目となります総合振興計画の審議会を始めさせていただきます。本日は、地方創生推進交付金事業の効果の検証と認定地域再生計画の中間年評価を行っていただくことになっております。地方推進交付金事業につきましては、平成30年度から今年度までの3年間で事業を実施しております、今年度で終わりということでございますが、今回は昨年度の実績の評価をいただくということになっておりますのでよろしくお願いいたします。なお、本日は自由にご意見をいただきまして、意見のとりまとめについては次回の会議で行いたいと思いますのでよろしくお願いいたします。それでは開会にあたりまして会長よりご挨拶をいただきたいと思います。

（八木会長）

皆さんこんばんは。夜間にかかわりませず総合振興計画審議会にご出席いただきましてありがとうございます。この寒い中、また県内でも新型コロナウイルスが蔓延しておりますが、大変重要な会ということで、会議の進行にあたりまして、お互いマスクをしながら十分な議論をしていただけたらと思います。

先ほど事務局より説明がありましたように、本日は地方創生推進交付金事業の効果の検証ということですが、ちょうど本日の高知新聞の社説の方に地方創生について書かれておりました。決してうまくいっておるという内容でもなかったわけですが、私達も地域をみたときに、人口も減少しておりますし、なかなか元気が出るようなまちづくりができてないなと思うところもあります。しかしながら、行政と議会と住民が共に取り組んでいく中で、地域を維持し、発展させていく取り組みになっていくのではないかと思いますので、ぜひこの中間年評価の中で、皆様方の多様なご意見をいただけたらと思います。簡単でございますが開会のご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

（事務局）

ありがとうございました。それでは、早速会議に入らせていただきます。お配りさせていただいております評価資料の順に沿ってご説明をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

(八木会長)

それでは、資料の2ページになりますが、令和元年度の具体的な取り組み内容及び評価について、1番の四万十町を知る取り組み(情報発信体制の整備)の(1)情報発信事業と(2)広報戦略策定及び情報共有促進事業について担当課よりご説明をお願いします。

(にぎわい創出課)

情報発信事業について説明<省略>

(企画課)

広報戦略策定及び情報共有促進事業について説明<省略>

(八木会長)

ありがとうございました。それではご質問、ご意見を受けていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

(横山委員)

四万十町の東京オフィス通信の第1号(7月25日発行)を過去に見たことがありまして、2か月後に第2号を予定しているというチラシを見たことがあると思うのですが、これは定期的に発行されているものでしょうか。

(にぎわい創出課)

令和元年度の第1号は7月25日に発行しておりまして、第2号は11月13日発行、第3号は12月25日に発行させていただいております。今年度につきましては、コロナの影響もあり、事業が思うように進んでいないということもあり発行しておりません。

(三浦委員)

どこの地域においても、人口が減っていて同じような状況であり、移住者に来ていただくための取り組みが行われていると思います。その中で四万十町を選んで移住してもらうというのは、大変難しいことだと思います。

私が移住を考えている立場であれば、よその地域から四万十町に移住した人から、いろいろ情報を聞きたいと思うので、例えばホームページのここを見たらそんな情報があるとか、町を通じて移住者の方を紹介してもらって、直接話を聞けるとかそういうことができればよいのではないかと思います。

(にぎわい創出課)

先ほど事業の報告で申し上げておりませんでした、ファンミーティングの中で先輩移住

者の方に来ていただきまして、四万十町の生活についてリアルな話もしていただいているところです。ただ、コロナ禍においてオンラインが多くなってきておりまして、オンラインとなると先輩移住者と一緒にということができておりませんので、今後は委員さんが言われましたとおり、もっと生の声をお伝えできたらいいかなと思っています。

(酒井委員)

2点あるんですけど、広報戦略マニュアルというのは役場内で情報発信するときに、ブランド化していくということで、きれいにまとめてあると思いますが、この戦略マニュアル自体は役場以外の民間の事業者さんにも一緒に使っていくという取り組みはされていないのかということと、先ほどの説明の成果の方でイメージ向上により観光振興にもつながっているということなんですけれども、町が行っているインスタグラムとかSNSを使った情報発信の取り組みについては、とっても良い取り組みだと思うんですが、写真も動画も美しすぎる面があるかなと思うところがあります。それを見て、町外の方が四万十町に来たときに、ちょっとイメージと違ってるということになってもしないかなと思うんですけれども、その点について広報の担当者からみて、情報の出し方のバランスにも配慮いただけたらいいかなと思いました。

(企画課)

2点目についてはありがとうございます。実際来ていただいた時がっかりされてもということもあるので、正直な情報といいますか、例えば川だったら、川の楽しみ方の提案ですとか、そういった視点でこれからも発信していけたらなと思っています。

最初のご質問のマニュアルを町内の事業者さんにも使っていただくということはないかということなんですけど、資料の課題のところにも書かせていただいていたのですが、例えばロゴの使用というところであれば、町が発信するものだけではなくて、事業者さんが自由に使っていて、それを発信していくということにも繋げていきたいと思いますので、マニュアルの業者さん向けの配布や、ロゴの使用についても今後進めていきたいと考えております。

(森委員)

四万十町東京オフィスの情報発信に大変興味がありまして、東京で情報発信をして将来的にはこの四万十町を豊かにしていくということが目的であると思いますが、その中で現地ツアーや様々な取り組みがされていると思いますが、具体的な成果があれば教えてください。

(にぎわい創出課)

先程移住者数についてはご説明をしておりましたが、四万十町が合併して初めて社会増を実現した年が平成28年度にございまして、翌年190人の方が移住してこ

られて、四万十町の注目度がいっきに上がったわけですが、その中身を分析しますと、四万十町の出身者が190人のうち、たった2割ということになりました。

先ほど他の委員も言われましたように、移住者の取り合いとなっている中で、四万十町内の空き家も少なくなってきた、住む家がないという現状で、どうやって転入者を増やせるのかというところを協議した結果、四万十町出身者にスポットを当てて、集中的に情報発信をしていこうということになったわけです。町内の出身者であれば帰ってきたときに住む家がありますので、そういった方に効果的に情報発信をしようということでこの東京オフィスの取り組みを始めたわけでございます。その結果移住者数は177人に若干減少はしたんですが、内訳をみると町内出身者が4割に増えております。それはなぜかという、こういう集まりの中で、四万十町の魅力をしっかり伝えて、帰りたいという思いが皆さんに伝わったということで、はっきりと数字にも表れているのではないかと考えています。そうしたことが成果として挙げられるのではないかと考えています。

#### (酒井委員)

今回出している資料と少し違う話かもしれないんですが、四万十町通信の中で、保護者と子ども達へのアンケートの結果が載ってまして、保護者の方は役場からのお知らせに興味がありますかという質問の中で、興味があるが78%だったんですが、中高生になってきたら、興味がないが65%になっています。町の望んでいることも、転出者がもう1回帰ってきてくれるということを重視していると思うので、中高生に対しても四万十町の魅力とか、外部とのつながりとかをもっと出していけたらいいのかなと思います。

#### (企画課)

アンケートをとる前から当然中高生については、興味がないという答えが多くなるだろうという予想はしていました。といいますのも、今までの広報誌は町の施策とか制度を中心に掲載していたからです。それを今後中高生が広報誌に対してもっと興味をもってもらえるような、まちの魅力を発見できるようなものに変えていきたいと考えているところです。今月の12月号の広報誌には商品券をテーマにしまして、まちの魅力を楽んでもらえるようなものにしたいと考え、見開き3ページで町内のいろんな店舗や観光スポットを写真と合わせて紹介しました。また、高校生に興味をもってもらうように、モデルも「じゅうく」(町営塾)のスタッフさんを起用して作ったんですが、後日モデルをやっていたスタッフさんにお聞きしたところ、高校生が広報誌をもって、スタッフさんのところに来てくれたそうで、かなり反響があったようです。そういった取り組みの中で、中高生にも四万十町の魅力に気づいてもらい、四万十町を好きになってもらえるような情報発信の仕方も続けていければと考えています。

(酒井委員)

ありがとうございます。もしよかったら、今後の取り組みの中に中高生がそういう企画に参加できるように、小さくてもよいので、考えてもらえたらと思います。子どものころから、そういった企画に参加できる機会があれば、まちづくりに関わっていくことが身についていくと思いますので。

(岡村委員)

ご説明ありがとうございます。私は仕事柄、いろんな自治体さんとお仕事させていただく機会が多いわけですが、情報発信につきましても、費用対効果ということがかなりいわれた時代がありまして、それによって何か失われたものもあるんじゃないかという気がしております。こうした情報発信というのはすぐに分かりやすい成果が出るわけではないと思いますが、いろんなところに波及していくものだと思っていまして、非常に意義深いものだと思います。ぜひこういった事業をしっかりと息長く続けていっていただければと思います。

(八木会長)

まだご意見はあるかと思いますが、本日は4項目控えておりますので、次の項目に進めたいと思いますので、よろしくお願ひします。それでは、続きまして2番目の四万十町を体感する取り組みの観光振興事業についてご説明をお願いします。

(にぎわい創出課)

資料3ページ②四万十町を体感する取り組みの(1)観光振興事業について説明<省略>

(八木会長)

ありがとうございます。観光事業についてのご説明をいただきましたけれど、ご質問やご意見などありましたらよろしくお願ひします。

(山本委員)

観光振興事業の成果のところですが、窪川まつりの来客数が平成30年度の実績から令和元年度の実績がかなり少なくなっているようですが、何か原因がありますか。

(にぎわい創出課)

来客数については、商工会さんからの聞き取りの数字を記載させていただいておりますが、来客数が減った原因としては、おそらく天候が影響したものと思われまます。

(山本委員)

今年は、新型コロナウイルスの関係でかなり少なくなると思いますが、何か考えていることはありますか。

(にぎわい創出課)

今年については、新型コロナウイルスの関係で軒並みイベントは中止となりましたが、徐々に回復の兆しもみえてきてきて、桜マラソンについては、今のところ四国限定で開催するという事も聞いております。今後につきましては、コロナの終息具合を見ながらイベントも開催していきたいと考えております。

(藤澤委員)

先ほどご説明のありました観光列車ですが、影野地域の住民の方が観光列車のおもてなしの取り組みをされていて、友達に誘われて私もお手伝いをしたことがあり、何回か観光列車にも乗ったんですが、その時実感したのが、本当に観光目的ではなく、単純に列車が好きの方がいらっしゃるんだなということです。毎週大阪から飛行機で高知まで来て、高知駅から窪川駅まで来て、どこへもいかに駅にずっとおられる方もいらっしゃいました。また、大きな観光バスで30人ぐらいお客さんが来られる時もあります。そのバスで来ていただいた方をなんとか町内も回ってもらって、宿泊してもらおうとかお土産を買っていただくことにつながれたらと思ったことでした。また、観光列車の音楽をつくったハナカタマサキさんという方がおられるのですが、その方も実は窪川が好きで、窪川駅でコンサートをしたこともあるんです。そういった繋がりを大切にして、継続してやっていかなければならないのではないかと思います。

(横山委員)

観光振興事業についてですが、体験型観光という周遊を含んだ事業というのは滞在時間を延ばすということで、すごくいい事業だと思いますので、これからも取り組みをお願いしたいと思います。それから、成果の欄につきましては、イベントの事が中心にかかれておりますので、できれば過年度の課題に対して、今年はどういうふうに取り組んで、結果としてどうだったのか記載をしていただくとわかりやすいと思います。

また、資料の作成にあたっては、お忙しいとは思いますができれば年度内に作成して、年度内に総括して次年度に生かすというふうにしていただければと思います。

(岡村委員)

四万十町には体験型の観光メニューはたくさんあるのですか。

(にぎわい創出課)

他の自治体と比較したことはないのですが、四万十川での体験メニューについてはカ

ヌーやラフティング、最近ではジップラインとかキャンプ場も沢山ありますし、そういったものをつなぎ合わせる形で、四万十町の周遊に繋げていきたいと考えています。海も山も川もあるので素材には恵まれていると思います。

(岡村委員)

ありがとうございます。素材は沢山あると思いますが、じゃあ商品はと聞かれると、まだまだ作れるものも沢山あるんじゃないかなと思いますので、そういうところにも少し目を向けていただくのもいいかなと思います。

(森田委員)

岡村委員のお話と関連するかなと思いますが、四万十町にはすごくいろんな素材があって、その素材を生かしてメニューを作って売り出していくということをしている方も沢山いるのかなと思います。今後の課題と対策にあるように、いろんな取り組みや素材を強化してやっていかれると思いますが、方法論といいますか、先ほど影野の駅のお話があったと思うんですが、多分役場の中だけでは補足しづらい情報もあると思います。具体的にこうしたらというご提案まではないんですが、例えば先ほど観光列車のお話がありましたように、実はそんなに気づいてなかったがやけど、こんな強い素材があるとか、来てくれている人の動きはこんな動きがあるよねとか、そういう情報をしっかりと拾い上げる仕組みがとれるようであれば、その地域独特の魅力を出せるということや、町内の他の地域にもしっかりとその情報をフィードバックできると、いい観光メニューが出来ていくのではないかと思いますので、ぜひ課題と対策のところにある取り組みを検討していく際には、できるだけそういった情報が拾い上げられるような工夫ができると良いのではないかと思います。

(にぎわい創出課)

ありがとうございます。観光列車については、はじめての取り組みで、どういったお客さんが来られるのか、年齢層についても事前にJRさんにお聞きしておりましたが、最初は本当に鉄道が好きな方がこられていました。また、その後旅行会社のツアーのお客さんが増えてきまして、だいたい4割ぐらいがツアーのお客さんだったと思います。今後もどういった方がよく来られているのか調べまして、今後の取り組みにつなげたいと思います。

また、利用された方の声を聞きますと、沿道で手を振り歓迎していただくのはとてもうれしく思い出に残ると聞いております。ぜひ、今後とも町民の皆様にご協力をお願いしたいと思っております。また、観光列車につきましては、この先10年ぐらいは続けていくということでJRさんにもお聞きしておりますし、長いスパンで、宿泊もしていただいて、できるだけ町内にお金が落ちる仕組みも考えていきたいと思っております。

(佐竹委員)

自分の方から素材について、少しお話させていただければと思います。自分の新しい会社の方で取り組んでいることで、ご存じの方もいらっしゃるかも知れませんが、四万十川アウトドアサウナという事業を12月から1月いっぱいまで実施させていただいております。

アウトドアサウナでは、危険リスクを回避しながらですけれども、冬の川に入っていることをやっています。皆さんは冬の川にはあまり入ったことないと思うんですけど、自分も以前は夏に川に入ったり、漁をしたりすることはあるんですが、冬の恵みに触れることが少なかったわけです。そんな中で東京からとかいろんな人に来ていただいて、冬の川に入水した感想をいただいた時に、その時は水温が約10度ぐらいでしたが、すごく水がやわらかい、いい水ですねという感想をいただきました。同じサウナの施設に入っても、水がやわらかくないと肌にささって痛いということを知りました。そういう意味では四万十川の水はとて入りやすいということなんです。また、四万十川の水が地域の人達の努力できれいに守られているからこそ、こういった体験ができるわけですし、子ども達と一緒にサウナに入ることもあるんですけど、入れる川がそこにあるということ伝えることができるいいきっかけになると思います。

今までになかった感性を入れることで、今までになかった素材のを見つけ方ができると思いますし、そういう素材の良いものを見つけて、また違う何かと組み合わせていくとおもしろい取り組みになり、まちが輝くのではないかなと思います。

(酒井委員)

先ほどの佐竹さんのお話ですごく共感するんですが、役場から出してもらっている電話帳ぐらいのサイズの四万十町のなんでも冊子みたいなものがあるんですけども、それを見てみると12月のイベントがゼロなんですね。みんな冬のイベントにすごく思いあぐねているなと思うところがあって、宿泊業をしている人も困っているような気がします。課題のところを見てみても、イベントは大きく人も動きますし、その時は人が呼べるかもしれんけど、課題として一過性のもので終わってしまうことも多いと思うんですが、四万十町の観光イベントの紹介のところでは、眺める・遊ぶ・泊まる・お祭りとか、こういうのを見ても四万十町の良さをここに全部集約して書いてくれているけれど、ここに行って実際こんなことができますよということと組み合わせないような気がするんですね。そこがすごくもったいないなという気がしています。

また、よその地域の人に聞いたら、例えばロッククライミングをされる方なんかは、高知はすごく魅力的な場所らしいんですね。四万十町がそうかなのかは分かりませんが、一度宿泊の場所を決めたら、そこが拠点となって、ずっと通うという話を聞いたりします。また、私はライダーズイン四万十の管理人をしていますけど、アユ釣りのお客さんがいて、毎年来られる方が何泊もします。その時に四万十川が汚かったり、鮎が遡上しなかったりすれば、おそらくお客さんも来てくれなくなると思います。兵庫県ではコウノ

トリの里ということで、きれいな田んぼで作ったお米を販売して観光客の集客につなげていますので、四万十町でも四万十川をもっと前面に出していただいて、遊びに来ていただいた時に、その中で町の自然環境にも寄与するようなそういった取り組みがあってもいいのかなと思いました。遊びに来た人も、町民もそういったところへ意識が行くような取り組みが1つ欲しいと思います。そうれば、子ども達も四万十川に対してプライドを持つと思いますし、もっと意識がいくようになると思います。

(八木会長)

ありがとうございました。観光振興は、一部の団体や行政だけがやることではなくて、一番住民が参加しやすいところでもありますし、PRも住民から発信していくということが効果的であると思いますので、例えば四万十町はなんでも売っているスーパーのようではなくて、専門店のようにその分野に特化したものを売っていくと、そういうことも必要かなと思いますので、今後の取り組みの中で検討していただけたらと思います。

(山本委員)

私は、最近よく五社の橋のあたりをウォーキングしているのですが、夏でも冬でも川のあたりによく霧が出ていて、とてもきれいなんです。他のまちの方からは、窪川はよく霧が出ていていいねと言われるんですが、私達はそれが普通になってしまっているんですが、もっと霧のまちということを発信してみてもどうでしょうか。

(にぎわい創出課)

ご提案ありがとうございます。以前、窪川町の頃に霧のまちフォトコンテストということで実施したことがあります。最近、霧に特化した取り組みは実施できてないですが、ちょうど先ほど観光列車の話もありましたが、影野のあたりはものすごく霧が出る場所です。観光列車の今後の取り組みやPRポイントになるんじゃないかと思いますので、今後の取り組みにつなげていきたいと思っています。

(八木会長)

まだまだご意見はあると思いますが、次の3番目に移りたいと思います。3番の四万十町に住む取り組みとしまして、移住促進推進事業についてお願いしたいと思いますが、こちらについては、1番、2番と違って町の人口を増やしていく、町の力をつけていく事業ということになります。昨年度につきましても出生人口が非常に減少しております。そういう意味ではこういう取り組みを続けていくことは必要だと思いますので、取り組みの内容についてご説明をお願いします。

(にぎわい創出課)

移住促進推進事業について説明<省略>

(尾崎委員)

空き家の調査、空き家の情報の発信というところで、お聞きしたいのですが、四万十町で空き家がどれくらいあるのかということと、毎年空き家の数は増えているのか、また空き家の情報発信は町のホームページだけなのか、他の発信の仕方もあるのか教えてください。

(にぎわい創出課)

空き家調査につきましては、平成26年度に実施しております、活用できる空き家が800戸あるということで確認しております。ただ、あくまで活用できるであろうという数ではありますが、正月やお盆に帰省するので貸せないという方が多いというのが現状であります。ただそれだけでは駄目ですので、地道に現在も空き家の掘り起こしを行っています。今は、中間管理住宅の整備が進んできましたので、中間管理住宅にしてほしいという連絡があったり、区長さんを通じて情報が入ったりということで、現在空き家の情報発信をしています。情報発信の方法でございますが、町のホームページから移住作戦というところに入ってくださいか、「しあわせしまんとせいかつ」いう独自のホームページを作ったり、一番反響があるのがフェイスブックの方になりまして、そちらの方で情報発信をしているということになります。空き家については、ないように見えるんですけど、情報を出したら2日で決まってしまうなど、ないわけではなくて、待っている方が多いという状況です。

先ほど、課題のところでも全国的に移住志向が低調になっていると言いましたが、今年度についてはコロナの影響もあって地方志向が高まり、昨年度と比べると11月末時点で移住者数が36%増加しており、105人移住者が入っているという状況です。ですので、このペースでいけば、平成29年度に年間190人移住者が来た時があったのですが、その時と同じぐらいの数になるのではないかと思います。そういった状況の中で空き家が少ないということになっています。

(野村委員)

移住者にとって気になるのは、仕事だと思うんですが、一般的に考えて、四万十町に豊富にある仕事は農業、林業、水産業になるのかなと思います。町としてそういった仕事に対してどのような補助とか援助をされているのか教えてください。

(にぎわい創出課)

補助ということに関しましては、国が進めている移住支援金というものが制度としてございます。どういったものかといいますと、首都圏から地方に移住した場合に、単身で60万円、世帯で100万円支給されるというものがありますが、これはあくまでも高知県のポータルサイトに登録している事業所に就職した場合が支援の対象になります。それと、支援というと定住者とのバランスというのがすごく難しいところがありま

して、移住者に対する支援といえればそれぐらいということになります。ただ、近年では交通網の発達によりまして、例えば仕事は須崎市ですが、居住地は四万十町においてもらうとか、そういった方も増えておりますので、仕事に関しては広域で考えていただくということも進めているところです。

(酒井委員)

先ほど、移住者の数の説明のところで、窪川が116人、大正が15人、十和が13人ということで、数字に差がありますが、これは仕事の問題なのか、家の問題なのかということはあるですか。

(にぎわい創出課)

家の問題ということになります。窪川は民間の不動産屋さんがありますので、家もご紹介できるんですけど、大正・十和の方はなかなか空き家がないということで、そのために今年度、空き家相談員を雇用しまして、今重点的にやっているところです。

(八木会長)

他にありませんか。ないようでしたら、次の4番の四万十町で育てる取り組みへ移りたいと思います。この事業につきましては、ボリュームがありそうですし、なかなか難しい事業だと思いますが、継続して人材育成ができるということは、大変重要なことだと思いますのでご説明をお願いします。

(人材育成推進センター)

未来塾事業、四万十塾事業、産業振興塾事業について説明<省略>

(酒井委員)

これまで高校生への取り組みということで、以前から拡充されてこなかったんですけども、四万十高校や窪川高校に来てもらいたいということであれば、なぜ中学校へ「じゅうく」ができないのかなとそこが疑問です。十和の方は、特に高校が近くにないので、「じゅうく」自体がないですね。なので、関係性が薄くなってしまっているので、できたら小学校からとか何か一つ枠があって、「じゅうく」との関係性作りができていけば、もう少し自分が2つの高校に行くこともイメージできるのではないかなと思いました。

(人材育成推進センター)

酒井委員が言われるとおりだと思います。これは令和元年度の報告をさせていただいているわけですが、趣旨から外れるかもしれませんが、令和2年度からの取組を紹介させていただくと、近隣の市町村に町営塾のPRをはじめ、高校応援大作戦として取り組んでおります。また、通学費の助成などのPRに努めているところです。

来年度については、ご意見いただきましたとおり、高校だけの取り組みとなりますと、町営塾の魅力も十分伝わらないと思いますので、まず町内の中学校に対しまして、馴染みをつけていただくということで、「じゅうく」のスタッフが中学校に行くなどして魅力を伝えていきたいと考えています。

(神田委員)

質問がずれてしまうかもしれないが、お許してください。「じゅうく」というか「未来塾」は斬新で、なかなか他の自治体ではできないと前から感心して見ていました。その一方で、地元高校に生徒が集まらないということは、学力の面で親御さんが心配しているというのが本音のところだと思います。もちろん、高校の先生方も努力されていると思いますが、私自身は町役場からも近いところに事業所があり、町の取り組みは見えるが、高校の取り組みが、住んでいても見えてこない部分があります。その点で今、何をしているのかというところを教えてくださいたいと思います。

(人材育成推進センター)

神田委員が言われましたとおり学力の充実はとても大事なことだと思います。保護者の方から見て、高校を選択するにあたって、自分の子どもが将来、こういった進路選択、職業選択ができるのかということが大変重要だと思います。

「じゅうく」につきまして、その点をスタッフとよくミーティングもしながら、学力の向上について、進学実績も含めて、そういった成果も出せるように、背中を押すと言いますか、頑張ろうということでやらせてもらっております。それから、高校の取り組みが見えないということなんですけども、高校応援大作戦ということで、様々な高校の活動を支援する活動として、いろいろ取り組んでおりますが、その活動がなかなか見えてこないというのは率直なご意見だと思います。

また、高校の情報発信の部分については、高校自体が情報発信の苦手な方が多いと思うので、今回町としてお手伝いさせていただいているのは、「四万十高校、窪川高校はこんなところだよ」と、生徒が自ら策定した冊子を近隣中学校に配布させていただいたり、中学生が高校の説明を聞く場というものが、学校説明会以外にありませんので、その説明の場には是非四万十高校と窪川高校を招いてくださいということで、言い方は悪いですが、校長先生と一緒に営業活動をしています。実績としては、前回より4校説明する機会を増やしていただいたところです。ただ、中学生向けに周知した部分があるので、町民全体に広報ができていないのかというと、まだまだ難しい部分がありますので、次年度の反省点として高校と一緒に連携して情報発信できればと考えているところです。

(神田委員)

実は私も移住者なんですけれども、四万十町へ来る前に長野県で高校の教員をしていました。長野県は6つの通学区に分かれているんですが、私はその一番端っこにある僻

地校にいました。当然ながら人数がなかなか集まらないということになり、統廃合の動きがあった中で、結局学校は今も残っているんですけど、その原動力はなんだったのかというと、その高校の教員がその学校を残そうとしたということなんです。その一言に尽きます。どうやって残そうとしたかということ、子ども達の進路を保証しようということです。正直、全部で11校ある高校の中で学力は下から2番目か一番下でした。その子達を国公立に進学させようという目標を立てて、まず授業をうんと大事にするということ、それと徹底した生徒指導をするということを行いました。生徒指導といっても身なりをきちんとするか、しっかり決まりを守るとかそういったことです。それで、授業に集中しようと、その代わり僕たちは徹底して皆さんのバックアップもするし、部活も全力でやりますよというふうに取り組みました。その結果だんだん成果が出てきて、子ども達が集まるようになってきました。もともと一番奥の学校だったので、奥の方にいる子ども達が来る学校だったんですけど、街の方から子ども達が来るようになりました。その大半は不登校の子達でした。不登校の子達でもとことんバックアップしてやりました。ただ、不登校の子の中で、卒業できる子は半分ぐらいだったでしょうか。そんな中で、決して成績が良かったわけではなかったけど、3年間がんばって国公立に進学する子ども達が120人の中で5人から6人ぐらい毎年コンスタントに出てくるようになりました。そうすると、自動的に少し先生に手を焼かせるような子はその学校に行かせようという流れになってきて、やり方次第というのは実はいくらでもあるんだなということです。ただ、実際自分も体を壊してまで働いたので、みんなにやれとは言えないんですけど。なので、高校の先生もいろいろとやってくださっていると思うんですけど、なかなか見えてこないというところは、すぐに結果に繋がっていかないところで、その成果がもうちょっと出てくれば、また違ってくると思うんですね。そのバックアップを今きくと「じゅうく」が一生懸命やっているんだらうなということで見えます。きっと、もうちょっとで成果が出てくると思います。期待していますのでがんばってください。

(尾崎委員)

自分も四万十高校に行っている子と中学校3年生の親として言わせていただきますと、神田委員も言われたように、学校を残そうという先生達の思いというのは、子ども達にも伝わると思います。

娘達についても中学校と高校の距離があるということで、あまり高校のことを知らないということもあって、ただ人数も少ないし、部活もできないというのもあって、進学について悩むところもあると思います。この間、四万十高校の文化祭に娘と一緒にいったときに、学生は少ないが、少ないなりにすごく楽しそうだったという話が娘から出たんですね。やっぱり高校生が、学校生活について人数は少ないけれど、楽しいんだよということをもう少し中学生にPRしてあげたら、学校の魅力がもっと伝わるのかなと感じたことでした。それと、「じゅうく」は1年生から3年生までで4割の生徒さんが通

っているというご説明でしたが、どれぐらいの割合で通っているのか分かっていれば教えてもらいたいのと、産業振興塾の方で聞き逃したのですが、農業者ネットワークの中の新規就農者は何名ぐらいいるのか教えてください。

(人材育成推進センター)

通塾の状況なんですけれども、別冊の資料の2ページ目をご覧になっていただければと思いますが、令和元年度の事業報告書となっていますので若干数字は前後しますけれども、くぼかわ教室は77名中45名となっております。また、しまんと教室は58名中25名となっております。だいたい常時平均して15人ぐらいになるわけですが、3年生になりますと1学期が終わった時点で、進路状況が見えてきまして退塾される方もいらっしゃいますので、その時々によって数字は前後いたしますが、4割から5割ぐらいで通塾をいただいているところです。先ほど神田委員のご発言にもありましたが、先生方もがんばっているのではないかとということで、少し補足をさせていただきますと、先生方も進学あるいは就職の補習ということで土曜日にも貴重なお時間を割いて、生徒に寄り添う形で取り組んでおられます。学校独自の取り組みと放課後の居場所ということで、「じゅうく」がそれを補填する形で進めているところです。委員がおっしゃられたように、これが来年度すぐに成果が出るということではないのですが、この未来塾の取り組みを進める中で、徐々に進学実績の積み上げであるとか、魅力の1つとして発信していきたいと思っておりますのでよろしくをお願いします。

それから、産業振興塾の方ですが、資料の14Pの方に農業者ネットワークということで、令和元年度44名となっております。新規就農者を中心にとということですが、このうち約3分の1ぐらいだと思います。内訳で申しますと、窪川地区37名、大正地区3名、十和地区2名、中土佐町1、黒潮町1名となっております。中土佐町と黒潮町は、町外ですが四万十町の生姜農家の方が誘っていただいて、入っていただいております。品目別に見てみますと、生姜農家の方が14名、そしてちょっとこの集まりの特徴的なのは、有機農家の方も含まれているところです。今まで有機農家の方といいますと、慣行栽培の方と交流がなかなかなかったわけですが、いろいろな違いを乗り越えようということで、混在したグループでやっております。徐々にいろんな取り組みを通じて交流を深めながら、相互理解を図り挑戦しようという機運を育てているところです。

(佐竹委員)

自分の方が農業者ネットワークの会長をやらしていただいておりますので補足させていただきます。中土佐町の方を誘ったのは実は自分が誘いまして、本来四万十町の取り組みなので、そこまでやる必要はないとは思いますが、なぜ誘ったのかというと、その方は中土佐町で1人で生姜をつくっています。なので、仲間もおらず1人でやっているのを見て、誘ったのがきっかけです。やっぱり、農業をやるうえで、いろんな人に相談しながら自分もやってきましたし、それによって活力もつけてきましたので、仲間とか

相談できる相手がいる事が必要じゃないかなと思いました。それと、新規就農者というのは、普通考えるとゼロからイチになるのが新規だと思いますが、このネットワークについては父が農業をやっていて、それを継いでやる場合や、今までも農業をやっていたけど、本格的に農業に取り組もうと思いついてやることも新規だと考えているので、そういう考え方でやっています。また、この団体を作った時に定款にも書いたんですけど、この団体は未来のためにつくっています。僕たちが今現実的に乗り越えるべきハードルに向かっていくということはあたり前のことだと思いますので、どうやったら農業を残していけるのか、この会の力を借りながらやっているところです。

(岡村委員)

我々高知大学も農業者ネットワークの取り組みにご一緒させていただいております。新しいチームですので、今まで先輩方がやられてきたことだけをトレースするのではなくてしっかりと自分たちで新しいことを作っていくということで取り組んでおり、生姜の土壌分析の方も始めさせていただいています。うちの農学部も土壌を専門とする教員、それから微生物を専門とする教員が入り、生姜圃場の状況を見させていただいています。そこで教員ともよく話をするのですが、我々他方では、IOPいわゆる施設園芸の高度化をさらに進めているチームもあります。これは言葉が適切ではありませんが、もっと農業で儲ける、農業でビジネスを一生懸命しようとしているチームです。我々が目指しているのは、それとは少し違って、もちろん儲けることも大事なんですけど、ちゃんと家族で経営できる農地、農業をこれからも未来へ残していこうということです。今ある農業をしっかり次へとつなげていくという視点で取り組んでおります。

(酒井委員)

すごくありがたい取り組みだなと思います。私も子どもが3人いますので、高校をどこにするか問題はかなり切実なのですが、先ほど神田委員が言われましたように、高校の特筆すべき特徴が外に見えてこないのが不安に思います。中学校から高知市に通わせているという親御さんは十和でも割と増え始めています。せっかくビジネスプランコンテストや産業振興塾の中でいろいろなことについて勉強する場面があり、高校生・中学生に限りませんが、せっかくいろんな取り組みしてきているのに、その取り組みがうまくつながっていないように感じます。せっかくだから高校生も一緒に参加するとか、高校の魅力化にうまく絡めていけないのかなと思います。

また、町の取り組みに対しての参画が難しいというのは、子供のころからそういった体験をしてないからだと思います。子供の頃からそういう体験をしていれば、住んでいるまちにも愛着は湧くし、子どももたくましく育っていくと思います。四万十町はすごく良いまちなのですが、子供の数が少ないから体験する量が圧倒的に少ないと思います。ここまで守られている環境でそのまま外に出て果たしてこの子たちは大丈夫だろうかと思うくらい良い子ばかりです。

子ども達がせめて四万十町にいる間は上の世代とも横の世代ともつながりをもてる環境があればすごくうれしいし、それが海外とか他の県外の学性とかとつながりも見えたら手厚い教育が受けられているんだなと思って親としては安心して選ぶんじゃないかなと思います。

(鈴木委員)

鈴木と言います。十和地区に住んでいます。移住してきてもうすぐ9年目になります。1つ疑問に思うことがあります。仕事フェスについてです。我が家も移住してきて農業をしています。四万十町にある仕事って、農業とか林業とかそういうものなんじゃないかなと思います。ここに招かれた講師の方々っていうのはそういう感じではなくて、どういう観点からこの方たちを招いて学生たちに仕事を紹介したのか疑問に思いました。

(人材育成推進センター)

酒井委員のご意見ですが、未来塾、四万十塾、産業振興塾それぞれ縦割りの所もご指摘の通りだと思います。今、高校も新たな教育カリキュラムの導入を受けまして、高校の魅力化ということで、色々な学校で取り組まれています。窪川高校についても新たな魅力化の指針づくりに来年度から取り組む予定です。その中で、この町営塾をはじめ、色々な人脈と申しますか、四万十塾におきましても様々な講師の方との関係もできましたので、まずはスポット的な探究学習、そういった形で少しずつ四万十塾、産業振興塾の魅力や持ち味を塾のスタッフと考えながら提供したいと思います。

それから、鈴木委員のご質問についてですが、本町は農業、林業、漁業と第一次産業が盛んな町でありながらメニューに入っていないということでそれはどうしてかというご質問であったと思います。今回講師の選考にあたりましては、町営塾のスタッフがこれまで知り合った方々と言いますか、これまで培ってきた人脈を生かして、この町にはない職業選択もあるよということをお伝えしたくて、身近な職業ではないんですが、こういった形でお知らせした次第です。

(鈴木委員)

私個人の思いとしましては、生姜の畑の土壌研究とか、一見地味と言われそうな仕事でもすごく魅力がある仕事だと思うので、そういうのを堂々と発信できたらなと思います。あと、学校が減ってしまうということについては、人の体で例えると体の一部が使えなくなるぐらい大変なことなんじゃないかと私は思っています。私の子どもは昭和小学校に通っていて、数年前に昭和中学校が休校となりました。地域の様子を見ると、学校が1つなくなるというのは本当に大変な事だと感じています。お店がなくなり活気がなくなります。この場で言っているのかわかりませんが、学校を1つ減らすということはものすごい覚悟がいることだと思いますので、そこをどうしていくかを考えていか

なければいけないと思います。

(八木会長)

ほとんどの委員さんからご意見もいただきましたので、このあと事務局の方でしっかり整理をさせていただきたいと思います。他に審議会での進行等についてご意見はありませんでしょうか。ないようでしたら、これで審議会の方は閉じたいと思いますので、閉会にあたりまして副会長にご挨拶をお願いしたいと思います。

(船村副会長)

みなさん、長時間お疲れさまでした。本日は貴重な意見をいろいろと頂戴いたしまして、このコロナ渦の中でのこういう会合も来年以降、開催できるか分からないような状況にあります。人口割合で言うと全国で6番目に高い感染率が高知県で発生している中で、今回の審議会が開催されたことは非常に意味があったと思います。皆さん、今年も残り何日かになりましたが、尚、コロナ感染には十分気を付けていただきまして、また次回の会が開催されることをお祈りしまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。

— 閉会 —